

## 山に親しみ山に想う (13)

### — 濟州島の寄生火山 (7) —

<文・写真> =岡本=

#### 7. チョットした話 (その1)

##### (1) 絶景かな！

絶景かな！最も美しいとの印象を受けた景観は、オベックチャングン(五百將軍)(標高1639m、比高389m)の頂上からの眺望である。季節は2007年10月の紅葉の時期であった。漢拏山ハルラサン登山の4 コースの一つ、霊室コースの登山口より入って、約500mで登山路を離脱し稜線に入る。熊笹と自然林地帯である。小冊子「オルム」では、「人跡路は、少し急で土が脆く滑りやすい。振り返ると、紅葉の間にポルレオルムとイスロンオルムが見える。15分程でトルムン(石門)に着く。10m程の石柱の真ん中に人が通れるほどの穴がある。トルムンより少し上ると、霊室の谷や奇岩が見える最初の地点に着く。数分進むと、広い熊笹の原に着く。

北方向には岬々たる荒っぽい岩山、南方向には広い樹海の先に西帰浦市と海が望まれる。熊笹の人跡路を進む。岩山を登る。路は分明で難しくはない。5分程で奇岩群と通ってきた熊笹の原が眼下に見える地点に着く。ここからの眺望は、素晴らしく、あたかも仙郷に住む仙人になった心境になるほどである。…急に漢拏山の頂が視界に入る。ついで、ウッセオルム、パンエオルムが見えてくる。小岩の間に熊笹が生えている地帯で、その間をくねくねと進む。…登山道を行く登山者の列が見え始める。この辺りの地形をソングジャクチワと言うらしい。小さな岩が立っている所を意味するという。小岩にもたれてコーヒーを飲みつつ、漢拏山とその麓を構成する優しい姿のオルムの景色は、癒しである。」と記している。この後、正規の登山路に合流して下山した。この時に撮った絶景写真は、額に入れて机上に飾っている。



##### (2) 漢拏山の熊笹

「漢拏山のなだらかな樹海が湛える深い緑が形容しがたいほどに美しい。圧倒する緑である。しかし、サラオルムの稜線には、熊笹が我がもの顔に繁殖し、他の植物を排除してしまっている。熊笹が植物の多様性を壊している。座っている直ぐ横で、山紫陽花が熊笹に駆逐されそうになっている。」2007年7月末に漢拏山中腹のサラオルム(標高1325m、比高150m)を探訪した際の一コマである。紫色が鮮やかな漢拏山の山紫陽花が繁殖力旺盛な熊笹に蚕食されて、生気を失いかけていた。熊笹により生態系が壊される被害は甚大で問題化していた。笹は60年に一度花を咲かせて実を結んだ後、一斉に枯れると聞いている。この60年が曲者で、笹の生態研究を難しくして

いるという。離任にあたり挨拶に行った際に、島の老人から実を結んだ笹を頂いた。1945年以前に済州農林学校で学んだその人は、笹を入れた封筒の表に日本語で「漢拏山のくまさ」とスラスラと書かれた。



### (3) イサックチュッキ(落穂拾い)

「下山途中、殿様バツタを捕まえた。今年初めてのバツタである。車へ戻る途中、収穫が終わった大根畑に残された大根を1本「イサックチュッキ」して帰る。」(ナムサンボンオルム、標高179m、比高54m、2006年4月)と記している。幾度もイサックチュッキして農作物の頂き物をしたことがある。済州島では、畑の作物収穫の際、残らず全てを収穫してしまわないという慣習がかつてあった。貧者や弱者のために残しておくという思いやり、共存の考えから行われてきたものだ。

余談になるが、旧約聖書の中にモーゼの律法の一つとして「穀物を収穫するときには、畑の隅々まで刈り尽くしてはならない。収穫物の落ち穂を拾い集めてはならない。…これは貧しい者や寄留者のために残しておくなければならない。」との趣旨が記されている。2006年当時、済州島も豊かになったが、イサックチュッキの精神は、人々の胸中に潜在していたと思う。自分は貧者の気持ち、もったいないの思いから、収穫物の残りをイサックチュッキとして頂いた。

済州島は韓国で唯一のミカン生産地である。オルム全体がミカン園だったりする。収穫を終えたミカン園には、幾つかの実を残しておく慣習がある。害虫を捕ってくれた鳥への恩返しの実であると聞いたことがある。わが国でも「木守り柿」とかいう似たような慣習があるが、最近では、収穫する手間もないので採られずに残っている庭先の果樹をよく見かける。「木守り柿」ならぬ「木守り蜜柑」を時に失敬したが、木守り蜜柑は砂糖のように甘かった。

### (4) オルム火口内の水田

済州島は火山島なので水田に適した土地はない。雨水は急湍をなして海に流れ込み、伏流水は殆ど海岸の崖から滝をなして海に落ちる。このため陸稲は少しあるが、水田は無理である。例外として、島内に一箇所だけ、海岸近くのハノンオルムの広い火口が水田になっている。漢拏山の伏流水が海岸近くのこのオルムの火口原に滲み出て水を提供している。水田は浮田のようなので、収穫期の排水が問題であるという。



2005年5月末に、島の南岸の西帰浦市好近洞にあるハノンオルム(標高143m、比高88m)を訪れた。田植えの最中であった。「火口の平地は、21.6万平方メートルであり、水田になっている。苗代で働く人、田植えをしている人、ポンプで田の水を調節している人、水が張られた田の輝きなど田園風景が眼前に展開する。畦道を進み西側の稜線を登る。蜜柑畑で

ある。ハノンオルムの特徴は、外輪よりも火口の水田にある。外輪の下の水田近くは、沼地に

草が浮いているようであり、歩くと足が沈む。浮田のようだ。漢挈山の地下水が海岸近くのオルムの広い火口に滲み出て水田に必要な水を供給している。田植えには十分な水であるが、収穫期の水の調節が問題ではないかと、素人ながら考える。ハノンとはハダ(多い、大きい)とノン(田圃)が合わさった、「田圃の多い所」という意味である。水を湛えた水田を眺めていると、心が安らぐ。島内ではスプリンクラーで陸稲を栽培しているところがあるが、貴重なハノンの水田は保存すべきである。島内の溪谷が水涸れしてきていることを考えると、いつまで水田が続けられるか、気になる。水田の中に火口丘がある。ポロミである。水を調整するポンプの音がポンポンとゆっくり単調に響く。鷺が水田にゆっくり舞い降りる。農作業の人が人形のようにゆっくりと動く。自分は畦道に座り、ゆっくり景色に溶解していく。」

### (5) 山火事警防所

濟州島は、三多の島という。石、女、そして風が多いという。風の強い冬場には山火事がよく起こる。そのため、山火事警防所(監視所)が置かれているオルムがある。山火事の多い10月から3月頃までオルム頂上の警防所に年配者の監視員が詰めている。勤務は「毎朝装備(無線機、双眼鏡、呼子)を持ち、午前9時までに着く。入山者統制、入山者の人的事項把握など取り締まりに努める。日没まで勤務し、全入山者が下山後に下山する。3回以上無断離脱したら処分する。」(警防所備え付けの勤務要領)というものである。

監視員からタバコを吸うかとか、名前を尋ねられたことが数度あったが、他の人的事項把握をされたことはない。監視員は概して気の良い年配のおじさんであり、話し好きである。キジがよく獲れたとか一方的に喋る者が多く、聞き役にさせられるが、コーヒーやミカンをご馳走になったりすることもある。

警防所のあるオルムには当然監視員が通う道、人跡路がある。そんな道があることも知らず(麓から頂上の警防所は見えない)、自然林の中を茨を払いながら苦労してやっと頂上に着き、警防所を見つけるとガックリする。下山の際は通勤の人跡路を教えてもらう。実に多くの警防所を見たが、警防所ごとに監視員の人柄が如実に現れる。「ガスコンロ、カップラーメン、新聞などが整理されている。盆栽風に松の小枝が植えられたラーメンカップが詰所小屋の周りに15鉢ほど並べてある。監視員の人柄が偲ばれる。」勿論、ゴミ屋敷のような小屋も多かった。好々爺の監視員との雑談はこんな風である。「—タバコを吸うか、何のために来たのか—吸わない、趣味で歩いている—よい趣味だ、どれくらい登ったのか—201個目だ—へえ、368あるが、もう少しだね、毎週土曜日に—そうだ、—自分も歩きたいができない、(地図を見て)良い地図を持ってるね—2万5千分の1だ、これがあれば登るルートを推測できる、毎日出勤か、手当は良いのでしょう—そうだ。10月から3月までだ、給与はよくないが健康に良いからしている—この他に、頂上から見えるオルムについて、あれこれ説明してくれるありがたい監視員である。易しいコースがあるといって、下山口まで丁寧に案内してもらう。」こんな監視員ばかりではなく、風の強い日であるのに昼寝をしている者もいた。



(つづく)(次回がオルムの最終回です)